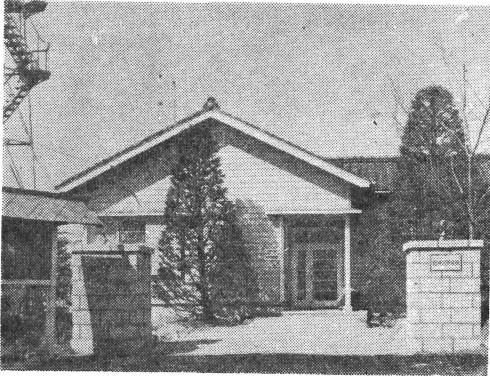
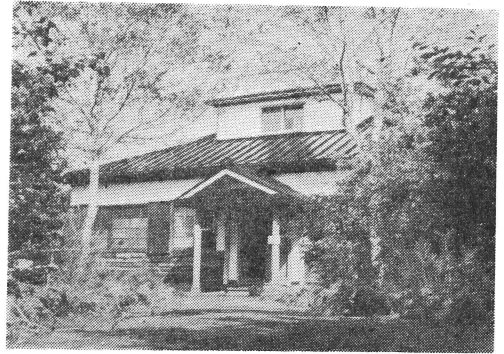


地方だより

軽井沢測候所



軽井沢測候所



軽井沢測候所追分分室

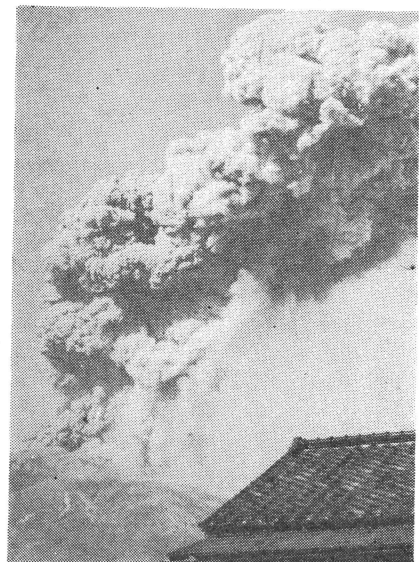
これからヘリコプターで長野に行きたいが、碓氷の気象状態はどうか」とか修学旅行で浅間高原に行きたいが、今夏の浅間山の火山活動の見とおしは？」というような照会や、明日の軽井沢はゴルフが出来そうかななどと東京から電話をかけてくる人もある。毎日の平凡な天気予報の問合せの他にこういう応答で、追いまわされる毎日である。

測候所の露場の高さは934mで、朝は天気良くても午後になると雲の中に入るような高いところにある。付近には国際的にも知られた軽井沢の市街地がある。気象だ火山だどめまぐるしく自然現象を相手に暮している者もおれば、同じ相手のもとにのんびりと遊び楽しんでいる人もいる。軽井沢は昔は夏の街であった。近頃は冬もなかなかぎやかな街になった。今年も大きなスケートの競技が催された。寒くなれば氷は自然に張るものと思っている人が多いが、理想的な氷はそう簡単に出来るものではない。特に世界から人を集めるような大会となると、氷質が日本の名誉にも関係し、スケートリンクの整氷には大変な気の入れ方である。つまるところは測候所に何とか best condition で持っていく方法はないものかと相談が来ることになる。

さて、浅間山の火山活動は天明の大噴火で千数百人の人命を失ったものをはじめ、大小合せて数千回の噴火を繰返し、多くの死傷者を出している。明治末期の活動に期に、日本最初の湯の平火山観測所が設立され、冬季の観測所として現在の当所の追分分室が出来た。昭和初期の活動で東大の観測所が設立され、更に昭和25年の大爆発で当所の血の滴の観測小屋が出来上った。これらには何れも、噴火の被害を何とかしてもらいたいという地元

民の悲願が秘められている。

この悲願の成果として積み重ねられた資料のおかげで次第に火山活動の様子がわかる様になり、ある程度の子知も出来る様になった。しかし、ある程度の子知が可能になると、火山の恐ろしさを忘れ、予知の限界を越えた行動をしようとする人も現われる。このような人が多くなると、場合によっては予知の出来なかった時代よりも大きな被害が起るかも知れない。火山観測の当事者は予知と学問的に取組み乍らも、その精度の限界を乗り越えてくる社会の動きに無関心ではおられない。観測者の努力の成果が正当に評価され、社会にプラスになれば幸なことだと考える今日このごろである。（関谷 溥記）



浅間の大暴発昭和33年12月14日